

琉球大学学術リポジトリ

マンガースの分布と食性について

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): マングース, 防除対策, 分布略図, 沖縄本島北部, 野鼠, ハブ, 害獣 キーワード (En): 作成者: 伊波, 興清, Iha, Kosei メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015207

マンガースの分布と食性について

伊波興清

(琉球植物防疫所)

I はじめに

近年琉球における野鼠が甘蔗、甘藷、パインアップルその他の農作物に及ぼす被害は、琉球農業試験場の調査(1968年12月のネズミ対策協議会の資料より)によると、約1,985,716弗(甘蔗、パインアップル、水稻及び甘藷の被害総計)と推定されその被害額はまことにおどろくべき数字となっており、何れの市町村でも野鼠防除対策に真剣にとりくみ、各種薬剤による防除の他、最近では座間味村を初めとする二、三の市町村では天敵として本土からイタチを導入するなど、野鼠駆除に対する一般の関心は急に高まってきた。天敵としてのイタチの効果については本土における研究によって高く評価されており、それがイタチ導入に対する若干の不安があったにせよ、大方の支持のもとに導入されたものと考えられる。

ところで、沖縄本島では野鼠およびハブの天敵として、明治43年にマンガースが導入されたことがあるが、マンガースの天敵としての効果については未だに的確な判定がなされていないのが実状と思われるので、取りあ

第1図 沖縄本島北部におけるマンガースの分布略図



えず現時点におけるマンガースの分布状況を明らかにするとともに(第1図)沖縄本島における地域別の導入放飼について、関係職員により若干の資料が得られたのでまとめて参考に供したい。

本資料をまとめるにあたっては、元病害虫専門技術員の東田端亀氏によるマンガース導入当時の詳しい状況の御教示、また関係諸氏から貴重な情報を提供していただいたので、別項に御芳名を明記して謝辞にかえさせていただきたい。

Ⅱ 導入と分布について

沖縄におけるマンガースは、明治42年、当時の東京帝大教授理学博士渡瀬庄三郎氏が御来島の際、琉球における甘蔗の鼠害と毒ハブの人畜に対する被害状況を調査され、これらの被害をマンガースの導入によって防除することを提言されたのに始まる。少数の反対論者もいたが県当局並びに有志諸氏の要望によって正式に導入することになり明治43年4月13日に、はるばるセイロン島から92頭の導入に成功し、第1表のとおり放飼または飼育し

た。そのうち県立農学校（名護在）に飼育した4頭はハブとの対戦に酷使のため全部死に、渡名喜島に放飼した4頭は一応土着し産子を認めたが2年後からは生息不明となった。その原因については明らかでないが1965年11月、渡名喜村役所経済課長 桃原茂一氏によると、古老の話では当時渡名喜島にはネコが多かったため、それによってかまれたかあるいはハブにかまれたのではないかとのことである。当時海岸線で顔面の皮がむしりとられた死骸を目撃した人もいるとのことだが戦後の繁殖状態は全く不明のようである。

第1表

年 月 日	放飼または飼育	頭 数	場 所
明治43年 4月17日	飼 育	4頭	沖縄県立農学校（名護在）
4月18日	飼 育	4頭	県立農事試験場（真和志村安里）
4月19日	放 飼	4頭	首里城内
4月19日	飼 育	4頭	沖縄糖業改良事務局（西原村）
4月19日	放 飼	4頭	渡名喜島
4月19日	飼 育	5頭	農事試験場（久茂地）
計		25頭	

注：この表は東田端亀氏から得た資料である。なお、25頭の他に4頭は渡瀬博士が本土に持ち帰られた由である。

結局、首里城内に放飼した個体と、県立農事試験場（真和志村安里）沖縄糖業改良事務局（西原村）および農事試験場（久茂地）で飼育後放飼した群（頭数不明）によって本島南部から中部まで繁殖し、さらに1945年頃までに名護町の許田付近まで分布が拡大した。

大体終戦時の1945年頃までの以上のような分布は一般の認めるところであるが、最近筆者が知り得た情報では、名護町の平地（特に琉球農試、名護支場の果樹園付近、またはピーマタ）をはじめとし、久志、屋我地、上本部村を除いては羽地、屋部、本部、今帰仁、大宜味、東、国頭村の一部にもマンガースの生息する事実が判明したので、野鼠、またはハブ駆除の目的でマンガースを導入された方々の誠意と努力は成功したと云える。次は各地の導入および目撃記録である。

1. 名 護 町

名護町の場合、戦後本島の中南部からの自然移動も一応考えられるが、それよりも人為的導入の労をとっていただいた名護町中区の岸本川三氏を忘れてはならない。岸本氏（理髪業）は1953年、たまたま北部農林高校生の池原君（南恩 納出身）が持参した5頭のマンガースを400円（B円）で買いとり飼育した。以前から宅地付近で野鼠やハブの被害の多いのをマンガースの導入により駆除すべきことを計画していた岸本氏が快く買い取ったことはいまでもない。2カ月程飼育しているうちに食性についてもかなり詳しい知見を得た岸本氏は、野外に放飼することを考え、名護公園に放飼に行く途中たまたま名護町役所の助役 宮城桃仁氏に出あい事情を詳細に説明してその後は町当局が買い取って放飼することにな

った。以後継続して北部農林の池原君によって南恩納から51頭のマンガースが運ばれ、名護町役所の経済課によって火葬場付近に10頭、公園6頭、瓦工場10頭、町内の東江（山川）10頭、名護農試の果樹園10頭、保健所5頭、計51頭が放飼され、現在では名護の平地ではマンガースは普通にみられるという。

とこで、当時恩納村ではさきに国頭村の奥部落に大量出したこともあり、村内のマンガースが乱獲の兆がみえだしたので1955年には村長名で捕獲禁止の指示がなされたこともあった。

2. 国頭村（奥）

国頭村の奥では、奥の林道開通時にハブの被害があまりに多いため、当時の政府林務課の奥の担当員、佐渡山安正氏の提案で南恩納から2回にわたって、（初回1951年宮城親昌区長時代、2回目1956年宮城達夫区長時代）計100頭のマンガースが奥に導入された。経費は初回3万円（B円）、2回目2万円で全額補助なしで奥区が負担、奥のマンカー、水源地付近、他1カ所計3カ所に放飼した。現在の繁殖状態は不明であるが、1965年9月に国頭村役所経済課長の宮城勇氏は、奥中学付近の茶園でマンガースを目撃しているので放飼後10年以上経過しているところから、ハブ、ネズミ駆除の効果は少ないにしても（但し、放飼後はいたるところでハブの頭部の食いちぎられているのが観察されているので、恐らくマンガースによるものと考えられている）一応土着していることはまちがいないようである。奥の場合、当初からハブ駆除が目的であるので、ネズミ駆除の効果についてはとやかく言われていないが、実際には毎年ハブ、ネズミの被害は多いと言われ、65年11月23日の朝は部落内のトイレでハブが発見されたり、また学童がかまれたりした。

3. 大宜味村

1952年村当局は野鼠駆除の目的で、中部の具志川村（現新垣村長の経済課長時代）より単価150円で150頭導入し、村内の14カ部落に雌雄1対ずつ放飼した。放飼後52年頃までは、畑や山裾でハブの頭部が食いちぎられたのがよくみうけられたが最近が発見されないとのことである。そのことについて当時の農改普及員前田貞四郎氏（現大東パイン専務）は、1952年～1959年頃までは山地に甘蔗やパインアップルの植付けがなく、マンガースの飼料となる野鼠の発生が少ないので、当時から甘蔗やパインアップルの植付けが多く自然に野鼠の発生量も多くなったと考えられる大宜味村に接近した東村の宇出

那覇に移動したのではないかと述べている。さらに前田氏は、あまり部落別に分散放飼したことも交尾繁殖の機会を制限した一因だろうとつけ加えている。また1966年3月～4月には東村担当の宮城農改普及員は大保で道路を横切るマンガースを2回も発見しているので、大保から東村の境界線付近では緩慢ながらも世代を繰返していることが考えられる。

4. 伊江村

伊江村では、1954～1957年頃にハブとの対戦をみせものにするため、ある人によって数回にわたって恩納村から30頭位導入されたが、その際飼育箱から逃亡したのが現在では野外に生息しているらしく繁殖の状態は不明であるが真謝の原野で目撃した人、また1964年には伊江村役所の現助役玉城金蔵氏などが野外での生息を確認しているの、一応土着していることは事実である。今後の繁殖が期待される。

5. 石垣市

1963年12月28日、石垣市嵩田在住の廖見福氏は野鼠駆除の目的で、沖縄本島から空路9頭を導入し、嵩田の自家農園付近に放飼した。繁殖状態については不明であるが、廖氏によると1963年までは甘蔗、甘藷に対する野鼠の被害が大きかったが1964年の甘藷には若干の被害があっただけで、甘蔗には殆ど被害はなかったと述べている。但し放飼後1回もマンガースは発見されないとのことである。導入の目的がたとえ十分に果せなかったにせよ、個人で導入された廖氏の意欲的な行為は野鼠防除上特記すべきものがある。

6. 運天港（今帰仁村）

渡喜仁の区長（1966年2月）豊里友伝氏によりおもしろい情報を得、詳しく聴取調査した結果次のことが判明した。

運天政春氏によると、9～10年前、与論島で野鼠駆除のため喜界島からイタチを導入したがその時利用した輸送船国分丸（20トン前後）が運天港に入港接岸して牛をおろした際に、与論島にすっかりおろした筈のイタチが2～3頭、牛の下船のすきに乗じて上陸したのを目撃したとのことである。夕刻であったため、その後の状況は知らないが、その後同じケースで運天港に上陸侵入した個体のあったことが考えられると述べている。ところで其後は運天、渡喜仁区域において時々マンガースが発見されると言われており、また運天政春氏自身も目撃しているの、一応運天港周辺に土着したものと思われる。

しかし、喜界島にマングースが生息しないことから推して、運天港に上陸したと言われているマングースは恐らくイタチだろうと思われる。(1965年11月に鹿児島農業試験場、大島支場の栄政文氏からの私信で与論島では、1957年に200頭のイタチを導入したことがわかった)なお今帰仁村の経済課長、小那覇氏によると、今帰仁の仲尾次や湧川にもマングースが発見されると言うが運天港に上陸した喜界島産のイタチが繁殖しているのか、または名護方面よりのマングースの自然分布かは不明であるので、その方面では捕獲して種の同定をなすべきである。また呉我山果樹試験地の山田氏も湧川ではマングースは普通に発見され羽地村の呉我付近でも多いという。

7. その他

イ. 本部町では直接導入した事実は知られていないが、名護から屋部、崎本部と半島伝いに自然に分布した個体と、同じく名護から伊豆味線経由して本部の並里にまで分布したと思われる二つの経路があり、たとえば屋部村担当の平得農改普及員は、屋部村の旭川、中山などでよくみかけると言い、また名護の岸本川三氏も中山における分布を確認し、名護農試の金城賢氏は崎本部でしばしばみている。また本部町の並里経済課長によると、並里区在住の親川孫三氏は伊豆味に近い並里で(1965年5月)道路を横切るのを目撃したと述べている。マングースの習性からみて山や谷を越えて移動するよりは、平地の道沿いに移動したと考えるのが正しいかと思われる。

第2表 マングースの胃内容の定性的調査

1. 終年の定性的調査表

分類	摘 要	食 飼 動 物 の 種 類
哺乳動物		オキナワハツカネズミ, エジプトネズミ (?), アカクマネズミ, クマネズミ, ドブネズミ, ネズミ (細別不明)
鳥 類		スズメ (?), 小鳥 (細別不明)
爬虫類		トカゲの一種, アラカナヘビ (細別不明)
両生類		カエル, (細別不明)
魚 類		
昆虫類		バッタ, トンボ, ツノトンボ, トビケラ, 甲虫 (細別不明) ハムシモドキ, ハエの幼虫,
唇足類		ナナフシムシ オオゲジ
円形動物		線虫 (寄生虫 ?)

さらに牛、豚の腸の物を好んで食する。また食性について、糸満高校の瑞慶覧教諭は野外の自然状態では、ウサギやヒナを襲うことがあるが胃を解剖すると、鼠の毛が多量にでてくると言い、また蛇やハブのそれらしいも

る。いずれにしてもかなり広く分布している事実を知ることができる。

ロ. 1963年、当時の伊是名村担当の大田農改普及員は野鼠駆除の目的で、本島から性別不明の1頭を導入放飼し、漸次計画的に導入する予定でいたが業務の都合で導入を継続することができなかった。1965年頃まで野外で1頭のマングースをみた人がいるが、恐らく種の保存は不可能であったのだろう。また1953年にコザ在住の大兼久文子婦人も中部から1頭導入、名護公園に放飼した事実があった。

Ⅲ 食性について

マングースが導入されてから58年も経過した今日、なお一部ではマングースが甘蔗、甘藷をも食害するものと考えている人がいるので1926年沖縄県警察部の申請によって、日本農林省が調査実施したマングースの胃内容の定性的調査結果の一部をみると第2・3表のとおりである。それらの胃内容物からみて、殆ど肉食性であることがわかる。さらに筆者らは1950年6～10月の間に旧琉球農業試験場(与儀在)の周辺で捕獲したマングースを飼育したが、甘蔗は勿論甘藷其他青菜類は全く食しなかった。普通餓死前30～60分には軽いけいれんを起すが、たとえ絶食による衰弱時でも甘蔗や甘藷には全くよりつかない。しかし生きた鼠類には捕食の動作を示す。生け捕った鼠類は好んで食するが、死んだ鼠は殆ど寄りつかないかまたはあまり好まないようである。

のは検出できなかったと言う。名護の岸本川三氏は生の甘藷、甘蔗は食しないが、煮た甘藷は少量なら食することを認め、生きた蛙肉はよく好み乾燥スルメは大好物だと言ひ、また絶食時は共食いのあることを観察してい

第3表 マングースの胃内容の定量的調査

イ. 終年の定量的調査表

分類	食飼動物の名称	個体数	備考
哺乳動物	オキナワハツカネズミ	7	
	エジプトネズミ	1	
	アカクマネズミ	2	
	クマネズミ	1	
	ドブネズミ	1	
	ネズミ(細別不明)	4	
	獣毛(ク)	1	
鳥類	スズメ(?)	1	
	小鳥(細別不明)	2	
爬虫類	アラカナヘビ	5	
	ヘビ(細別不明)	2	
	トカゲの一種	11 ~ 12	
両生類	カエル	1	
魚類	—	0	
昆虫類	トンボ	16	
	トビケラ	1	
	ツノトンボ	2	
	ハムシモドキ	1	
	甲虫(細別不明)	3	
	ハエ(幼虫)	45	
	バッタ	7 ~ 8	
	ナナフシムシ	8 ~ 9	
唇足類	オオゲジ	1	
円形動物 (植物質)	線虫(細別不明)	21	寄生したものであろう
	(イネ科の茎)	2	

注 其他, 月別の定性的調査及び定量的調査などがなされているが省略した。

る。以上食性の一端について述べたが、大体マングースは農作物に被害を与えるものではなく、むしろ野鼠を捕食するため甘蔗畑などに出現した際、たまたま農民に発見されたことが農作物の害獣として一部で言い伝えられている原因ではないだろうか。

Ⅳ むすび

野鼠の被害が多くなるにつれて、天敵としてのイタチがにわかに脚光を浴びた半面、マングースの影は殆どすれてきたにせよ、もし過去にマングースという野鼠を捕食する動物が生息しなかったら野鼠はより猛威を振ったであろうことを考えた人が果して何人いるだろうか。

いやそれどころか、指導的立場にある関係職員のなかにもマンガースを容獣視するのがいることは甚だ遺憾である。勿論過去におけるマンガースの飼育研究があまりなされていないことが大きな原因ではあると思われる。

1945年頃までの南部からの自然分布は、名護の許田付近までとされていたことはさきに述べたが第Ⅱ項で紹介したような、よき理解者の誠意と努力によって北部まで分布が拡大しつつある現在、各位のマンガースに対する保護的処置の認識を深める必要のあることは言うまでもない。例えば石垣市における天敵イタチを保護する条例

の制定がなされたように、沖縄本島でもマンガースの保護対策をたてるべきである。終戦直後にマンガースを捕獲してその肉を賞味した話は勿論感心できないが、さらに那覇市内や中南部における恒例大綱引やその他の行事などの際にハブとの対戦を見せ物にする行為なども大いに取締り、各位のマンガースに対する良心的愛護を切に希望するものである。おわりに本文をまとめるにあたっては次の方々から情報を提供して戴いたので記して謝辞にかえたい。

氏 名	住 所	情 報 の 蒐 集 月 日
東田瑞 亀	勝連村字南風原	1965年10月22日聴取 1965年11月9日私信
玉 城 俊 一	大宜味村担当農改普及員	1965.11.2 私信
大 城 保 盛	恩納村役所助役	1965.11.25 聴取
大 城 康 繁	恩納村役所経済課	〃 〃
桃 原 茂 一	渡名喜村役所経済課	1965.11.26 私信
金 城 賢	琉球農試名護支場	1965.11.25 聴取
坂名城 晋	琉球農試名護支場病害虫予察員	〃 〃
仲 村 松 秀	名護町担当農改普及員	〃 〃
瑞慶覧 長 方	糸満高等学校教諭	1965.11.26 〃
大 田 朝 善	伊江村担当農改普及員	1965.12.9 〃
宜 保 武 信	宜野座村経済課	〃 〃
宮 城 勇	国頭村役所経済課	1965.11.25 〃
宮 城 達 夫	国頭村議会議員	〃 〃
佐渡山 安 正	農林局南部営林署	1965.11.27 〃
宮 城 親 昌	国頭村奥	1965.12.14 私信
大 城 清 勇	上本部村役所経済課	1965.12.23 私信
宮 城 岸 清	名護町役所経済課	1965.12.15 聴取
岸 本 川 三	名護町中区	〃 〃
大 城 銀 清	金武村役所経済課	1965.12.27 〃
小那覇 安 清	今帰仁村役所経済課	1966.1.11 聴取及び私信
並 里 安 博	本部町役所経済課	1966.1.12 〃 〃
平 得 辰 雄	屋部村担当農改普及員	1966.6.3 聴取
山 田 重 信	名護農試、呉我山試験地	1966.7.25 〃
池宮城 秀 雄	今帰仁村担当農改普及員	1966.8.18 私信
前 田 貞四郎	大東パインK. K.	1966.9.5 聴取
宮 城 昇	東村担当農改普及員	1966.9.21 〃

引 用 文 献

- (1) 岸田久吉編 1927. 鳥獣調査報告 第四号
- (2) 東田端 亀 1962. 沖縄産マンガースについて 普及便り 2(4) 16—18